

嵯峨釋如堂の甬山僣然に

ついでの一考

沖 永定 伸

僣然が京都の人で俗性藤原氏、幼にして奈良東大寺に入り僧となり、東朝院の親理法師に就いて三論を学ば、又石山寺の元果法師について密教を伝授せり。と云うもその消息は詳外でない。しかるに事入宋に及びては、我が國はおろか中国に於て持筆されて居る處に於て、就中僣然を著名にしたのほどの入宋であるといひ得るのである。そこで以下私は日宋交渉史上より僣然を紹介し、且つ日本仏教の地位にも論究したいと思ふ訳である。

僣然の入宋時は恰も唐末大陸の政治的動搖その他人爲的自然的障害により遺唐使が寛平六年(西暦八九四、唐寧元年)唐^乾止され、正式に中国と日本との国交がなく、我が口人の海外渡航が嚴禁され、唯中国より来航する商船のみ政府の管理下に貿易が許容されると云う状態にあつて、^②頗る渡航入宋は困難な時であつたのである。しかるに幸ひな事には唯國境を超越する宗教方面に対してはその商船に便乗して僧侶の入宋が許され、而もその受理が唐末五代五十余年の軍國割拠の亂世が宋によつて統一安定をとりもとした時にあたるので、その入宋實現は大いに意義あるものと云えるのである。

(5)

先ず僣然がこの公的交通の廢絶した時代において、一体いかなる目的を懷いて入宋したので

あるかを徴するに、その入宋に際して母の修善の爲に作らせた願文に

「奮然天祿以來、有心渡海、本朝夕停乃賣之便、而不置入唐、而待商賈之客而得渡、今遇其便、欲遂此志、奮然願光參五台山欲逢文殊之現身、願次詣中天竺、欲礼紙四之遺跡、〔中略〕無事不成、無願不遂、奮然去難去之家鄉、棄難棄之恩愛、斷心於未知之域、委身於異類之人、〔中略〕然猶不顧軀命、不顧名利、渡海登山、忍寒忍苦、修行起勤、罪根漸滅、大慈大悲、願文殊、可以憐愍、可以相迎。③」

と告白せる如くその熱烈なる信仰意図はいかなる困難を受いても大陸における仏教の聖地特に五台山にのほり文殊の真容に爵し修行するを重き目的としたのであり而もその敬虔なる意図は八景の勅許さがるや平安仏教或は彼の周囲の大多數の人々から

「凡そ入唐求法の人には弘法伝教の如き希代の器にして行われたことであつて、奮然の如きが彼地に至つては日本にその人なしとの嘲をうつけるものである」

と非難があつたに拘わらず、再び

「我が入宋は求法の爲にあらず、無才無行の身ではあるが修行の爲にこそ至るのである」④
と決意、入唐求法請益僧即ち留學研究を主たる目的とした前代入唐僧靈仙・円仁と異なり、自己の罪障清滅の爲敬虔な修行巡礼僧たる性格を新に永観元年八月中国新船に身を委ね、

「旅衣たらゆく東路とほければ、いざ白雲のほとも知られず」⑤

と聖地をあこがれ生死の海をこび越えて渡宋巡礼の仕途についたのであり、かくて奮然は宋の太宗太平興国八年に中国に上陸したのである。

扱てこの奮然入宋の太宗太平興国八年と云うと、宋建国以来二十余年を至て所謂高祖建国の

際の分烈（吳越南漢割南唐後蜀北漢）もほぼおさまリ、最後に残つた北漢の討伐が終了し、新興國家の意氣盛んな時で、加うるに太宗は興仏の君主として

「浮屠氏之教有裨政治……凡爲君治人即是修行之地、行一好事天下報利即祇此所謂利他者也」②

と仏教の利他行を政治に實踐せんとする心根をもち、寺院を建立し長く唐の元和年間以來廃絶していた藏經院をも起して藏訳事業を初め更に仏教界最初の大藏經印刷事業を完結し③丁度藏經到着の時には更に印刷技術の集大成たる宋版大藏經の成つた年でもあつたのである。而も宗教方面のみならず、太宗は唐末より五代へかけての擾亂時代を經過した爲文化が一時後退したその文化一般の再興をも意圖していた事として、五代の動亂期に於て散失した書籍の收集復興を計り④一都の所封には圖書館を製備して文運を盛んにしたのである。このように宋代に至つて文化の興隆の氣運が醸成され著々復興の途にあつた際、雍熙元年（西厂九八四）太宗に召見せられ、喬然居士產品と共に本朝職貢今年代記、唐越王孝王新泰谷一登⑤等を献上太宗を大いに喜ばせ筆談を交えては、わが帝室の一系政府の組織文武官僚の世襲利、其他日本の國情を述べ、易世交代のはばしかつた五代を経、大陸統一の業完了し、而も長く國家を子孫に伝えようと考へてゐる太宗を感嘆せしたのである。即ち

「此處表耳、乃世祚悠久、其臣亦襲不絶、此蓋石之遺也」⑥

の言葉が物語る太宗の心中は、或は日本の國政にあやかりたいと思わしめたであらう——更に文運興廢遼書復興に努めていた太宗に中國に當然なくてはならぬ筈だが散失していた根本道德李経の新注疏、所謂唐の太宗の子越王貞の孝経新義を捧つた事は返つて驚異せしめた事と思わ

れるのである。

かく喬然は全く良い時期にめぐりあわせ而も平安鎮国の夢をやぶつて入京した爲、特に各方の書籍に特筆されるに至つたのであり、この間の事情は官模の正史たる宋史日本伝に特筆され、その日本國傳に關する知識も喬然と太宗との筆談が骨子となつて居るのであり、^⑩我國に殆んど知られない喬然が或はその他の文獻通考三百二十四、皇朝類苑十八、統志治通鑑長編二十五、公祖統記四十冊の書にも天々可成り詳しい記事として喬然が特筆される所以が存するのである。又かかる太宗から大いに優遇され紫衣を賜ひ法語大師の号を贈られ、以耒帶在中の一切の費用が官給され、かねて願望の遠き山西の五台山の聖蹟を巡り洛陽毫町の仏敎の偉觀を礼し天台山を巡拜し、帝都才宗（^⑪南都）に再歸し、更に寂尊生身のお姿を伝えた靈像と崇拜されし礪瑱王瑞像の模刻を懇請し勅許され、^⑫宋朝天下一後宮更に安置されていたが、この頃帝都啓聖禪院を新築此手に瑞像を安置していたので此の新寺に般仏傳と張榮を招顧し新しく模刻を完成し、^⑬この瑞像と共に新刻の宋版入藏を譲り受け更に十六羅漢画像などを將來永延元年、台泉寧海果の高人鄭仁德の船に便乘し歸朝したのである。

尚喬然は頼文に五台山巡拜後天竺に到り釈迦の聖蹟にも参らんと意圖した如くであつたが、それは當時の正法衰滅の思想明靡がそこにやがて人々に印度の敎祖の偉業を追慕する念を深めさせその発露からかかる誓願となつたのであるが、最も印度巡礼の殆んど不可能であり又五台山も少數の僧侶のみしか巡礼する事の出来ぬと云う容易ならざる事情、而るに寂尊の生身のお姿を伝えた靈像のまのあたり拜するに於ては敢て其の長途につくの必要がなかつたであらうと思ふ、即ちその主宰目的が五台山巡礼であり、まして一般民衆にとつて印度は勿論五台山巡礼

さへ實現不可能の卷にその大座五台山の文殊菩薩の信仰を我國に移植しようと意圖し、帰朝後、洛西の愛宕山五台峯を大陸五台山に準せんと恭請した事實は⑭生身仏の請来と相俟つて、初期目的の達成が肯せられ、後白河法皇の御環にかゝる柔塵祓抄に

「文殊は誰が迎へ来し、喬然聖こそは迎えしか、迎へしかや、伴には優境國るわううやらう正らう人、善財童子の仏座、さて十六羅漢諸天衆」

と歌われておるによつても、喬然が五台山文殊信仰輸入者として周知であつた事が伺われるのである。

兎に何、喬然は最初の版本一切を十六羅漢画像や、旃檀狀画像などもたらし、京洛の仏教界に迎えられ朝廷から特に種衆寮の衆人達が祇迎像をお出迎えの爲、山崎の津までこしむけられると云う^⑮、歡迎ぶりであつたので、やがてこの南都東大寺の入来五台山迎礼者喬然はこの靈像安置の淨域として支那オ一の靈場、日本仏教のあこがれの的、文殊菩薩の五台山の聖境を京都の西に移そうと計画したのである。丁度喬然が居ていた南都仏教は今や地の利を失ひ、新興の平安時に比ば山仏教が帝都に隆々の勢をのびしていたので、比叡山にむかいあつた洛西の愛宕山を五台山になぞらえ、この山に日本朝朝僧侶が偈仰している支那五台の名刹をうつして、この靈像を安置して新都に進出せんとする新帰朝の南都仏教徒としての愛子の情こもれる遠大は計画がうろたえられるのである。

即ち比叡山に何いあつて、京洛の要地を占め誰しも讃仰せざるを得ない印度伝来の靈像を本尊におし載いて五台山最古の寺大清涼寺を造営しようとして希望、その存命中には達せられなかつたが、弟子成尋が師の宿願を達すべく努力愛宕山の大清涼寺とまでは出来なかつたがその山下

の理窟寺に釈迦堂四楹像を安置清涼寺を築くに至つたのである。

以上略述せしのににても猶然ほ、敬虔そのもの聖地巡礼の壮途に登り、その熱烈な信仰的発露は彼地では全くよき時期とめぐり合せて最上の特価をうけたがこれによらずその真面目を保持してその初期目的を達成しその雄姿の中にも、はた又瑞像請来後京都にその地盤を求めるときにも蓋し復古思潮に基付く奈良仏教復興の微効とも實味あるべきものがあるのであり、云わじ日本平安朝の日宋文沙史上或は日本仏教史上の寵児として欠くべからざる地位を有するものとして注目をひく所以が存するのである。

- 1 元亨釈書 本朝高僧伝オ六十七参照
- 2 森元巳著「日宋文化交流の諸問題」三、日宋交通と日宋相互認識の發展、五三頁参照
- 3 本朝文辭十三 猶然上人入唐時島丹修白額文参照
- 4 〃
- 5 新古今集十 入唐し侍りける時いつはとか帰るべきと人の面い侍りければ、法
- 6 詠猶然の歌
- 7 統資治通鑑長講二丁四 太平興口八年の條
- 8 石岡
- 9 日宋文化交流の諸問題、元宗版一切を輸入に對する社会的考察 二一〇頁 参照
- 10 本朝高僧伝オ六十七
- 11 元亨四年本伝参照

12

本朝高僧伝

13

珠像起

14

十石記永延元年八月十八日の條参照

15

本朝高僧伝